入水鍾乳洞探檢

高桑良興

我國には處々に洞窟が多く，中には有名なものも少くない。山口縣の秋芳洞高知縣の龍河洞の如きはその屈指のもので，朝鮮平安北道の蝀龍窟は更に偉大なものとして知られるが，予は未だこれを探險せず，秋芳洞も偉大なものではあるが，今は餘りに人にあらされた跡が多く，龍河洞は近年の發見にかゝり，且つ地の利を得てをらぬ爲め，なほ人の力に汚されて居らぬ丈け，興味の優る點が多く，高知高等女學校教諭石川重治郎氏に依つて，近頃內部動物が調査され，約30種が得られたさうである。予も先年この洞を探ぐり，*Scleroprotopus inferus* Verhoeff なるヤスデの1新種を得て大に快を覺えたのである。東京附近では秩父鍾乳洞・日原鍾乳洞・倉澤鍾乳洞等があり，又富士山麓には大小の熔岩トンネルが多く，これらは皆學者の探檢に値し，鳥居元氏によつて *Niponiosoma aroglodytes, Scleroprotopus longiventris, Lavabates takakuwai* 等の新屬新種が，その內に產することが知られてをる。朝鮮京城附近の江東石灰洞からは *Antrokoreana gracipes* が新種として土居寛暢氏に依つて發見せられ，又琉球にある諸洞窟からは，先年山階侯爵家の探檢隊に依つて *Dolichoglyphiulus asper, Hylindogaster nodulosa* などの新屬新種が得られて居る。以上は皆ヤスデの種類であつて，洞窟內棲息動物の優位を占めてをるので，自然他の未見の洞窟を探らうとする好奇心をそゝるのである。本年夏八月予は福島縣磐梯山附近に採集を試みし時，偶然郡山より平に至る鐵道線に近く近來發見せられた入水鍾乳洞のあるを聞き，且つ盛夏の候が最も探險に宜しとのことで，歸來その機をねらひ，神俣驛長にもお世話になり，今は一日をも延ばし難く，十月二十二日東京にて動物學會のあるその日上野を立ち，常磐線を平にて乘り換へ，磐越本線

により，7時間を費し神保驛に下り，徒歩5粁で入水村につき，洞の發見者兼案內者である鈴木菊得氏を訪ひ，同氏の注意に依り全衣服を着換へ（コルテンのズボン等を別に持つていつた），少々大きな携帶品は一切持つて入ることが困難であるとの事で，只弓手に蠟燭，馬手にピンセツト，胸に採集管を納め，先づ漸く體を入れ得るほどの孔口に潜り込んだ。洞內は僅かに一本路を通してをるが，幅も漸く1米位で，上は何時頭をぶつけるかも知れぬ位，床は30糎位の深さの水の瀨が通つてをる。滑る心配は餘りなく，兩脚を擴げて水の兩岸をつたひ，兩手を擴げて岩壁の凹凸につかまり，頭を俯せて衝突を避け，徐々に進むのである。途に當つて Kettle 狀に凹んだ水溜まりがあり，丸材を中央に通してあるのを危く踏み越へると，高さ3米幅半米位の水量の可成りに多い瀧が滲々と落下してをるその內に數段の木製階子をかけてあるが，案內者は先づそれを登り，用意せる板子と藁束とを以て，水を一時せきとめてくれるその隙にその階子をよづるのである。處々六疊敷位の廣さの腔處もあるが，或は辛うじて體を入れ得るほどの竪穴に，脚先きから潜り込み，脚先きで暗中模索をやつて岩角を辿り，或は先づ入つた案內者によつて，左へ右へと脚先きの案內をして貰ふ。或は又高さ僅かに半米横幅のやゝ廣い岩の隙間を，腹を下にぺたりと岩につけ，大の字となつて横行數米せねばならぬ箇處もあり，又水深股に達する處を徒涉せねばならぬ處もあり，絕對暗黑のそれらの間を，兩手の燭とピンセツトを後生大事に須臾も離さず，兩眼は絕えず光つて動物をねらひつゝ，進むのである。鐘乳石・石筍は例の如く奇觀を呈してをるが，前記の大洞窟に比しては遙かに見劣りがする。例の如く處々に恰好の地名をつけてある。六地藏の如く並ぶ石筍のある處には地藏洞と名づけ，はやお供物まで上げてある。塔の如く衝つ立つた鐘乳石のある處に五重塔，ピヤノの如き音階を發し得る鐘乳石の長短の柱が並列する處に木琴洞の名が與へられ，その他雄洞・岩屋岬・龍宮等がある。蝙蝠の糞の堆積する所，尺蠖蛾の如き鼠色の蛾が岩壁にとまつてをるもあり，黑白のヤスデが動かざる如くに這つてをるのを見るに及んでは快

哉を叫ばざるを得なかつた。最終の奥までは600米あるさうであるが，身體の疲勞甚しく，內部の氣溫は四季を通じて50度位であるとのことなれども，冷水を渉りし爲めか，聊か寒む氣を催うし，且つ又同じ途を歸る困難さを想ひ，殘り$\frac{1}{4}$を略し，へとへとゝなつて洞を出た。洞內にて3時間以上を費やし，蠟燭數本を捧げ，漸く無事地上の人と成つたが，日は將に暮れんとし，冷雨蕭々として降る坂道を數町にして案內者の家に至り，先づ搾るほどに水浸りとなつてをるズボンやその他を着換へ，久しぶり昔し懷しの圍爐裏に榾柮火の恩惠を受け，玉蜀黍の鹽煮と大根の油だきといふ野趣滿々の厚志に蘇生の思ひをなし，やがて暗夜の大雨中をくゞつて數町の野途を左に滑り右にのめり，漸く國道に出で里餘にして元の驛に辿りつき，次の驛小野新町(にいまち)の溫泉宿に老體を息めた。この驛から5粁山上に「鬼ケ穴」と稱する矢張り石灰洞のやゝ大なるものがあるとのことであつたが，この度はこれを割愛し，次の日は鹽原附近をあさり一泊して歸京した。上記入水鐘乳洞は昭和2年右鈴木氏が發見したもので，氏は農家の人であるにもかゝはらず，頗る學術的の趣味の豐かな人で，予の採集についても甚だ有益の補助を與へて下さつた事を感謝する。氏の始めて洞內を探究した時，行く先きを遮つて岩壁が垂れ，その下の隙間から水の奔出する處に出會ひ，進行が全く杜絕した。その時氏の弟某君は兄の篤志に感じ，決死の覺悟を定め，蠟燭やマツチをゴム袋に納めてそれを頸にし，腰に繩をつけその場を兄君に托し，敢然としてその岩下を潛り漸く1の腔室のあるを發見し，信號を以て兄君を招きよせたさうである。大勇がなくてはできぬ業である。さて右洞內ではヤスデ2種數十匹，イシムカデ1匹，箱根鯢魚1匹，蛾數匹を得たが不幸にも蜘蛛を見つけることができなかつた。右ヤスデは2種とも新種らしくその1は正に *Mongoliulus* 屬と見てをるが，2種とも♂が僅かに2～3匹にすぎず，大に心細く思つてをる。イシムカデも新種と思はるゝが，これは♂1匹のみで，これ亦大に困つてをる。蝙蝠は今時季遲く高く潛んでゐるので捕へることが出來なかつた。然し鈴木氏の熱心なる必ず近い內に諸種の動物を送つて

下される約束をなされ，大に樂しみを感じてをるのである。右洞は今や文部省より天然記念物として指定を受けてをるが，土地の邊鄙なると人を招く丈けの設備を缺く爲め，折角の記念物もそれほど世に知られずにある。若しこれに幾千圓を投ずるものがあり，せめて通常着のまゝ內部に入ることができるだけに人工を加へたならば，多くの人を招來し得，土地の爲にもなり，又どんな有益な研究が飛び出さぬとも限らぬと思ふ。蜘蛛同好家も一見すべき處ではあるまいかと思ひ玆に禿筆を呵したのである。

龍　河　洞　の　蜘　蛛

石　川　重　治　郎

龍河洞は高知市の東方20粁の所にある下部三疊紀の奥化石灰白色の石灰洞窟である。筆者は昨年5月頃から此所の動物を調査してゐるが既に50餘種の動物が棲息する事を確めた。內新種10，新亞種1が確認され夫々專門家によつて續々發表されつゝある。

蜘蛛は4種居る。內3種は新種である。最初に發見されたのが

1) *Leptoneta melanocomata* Kishida〔MS.〕　ケグロマシラグモ

全洞1粁の間に普く分布して棲息する。不規則棚狀の網を張り，年中活動してトビムシ，ミヅアブ1種等を食とする。6個の單眼は夜光眼で眞珠光澤に輝く。各部の測定は次の樣である。

1.	頭胸部……長さ	0.8 mm.	巾…… 0.5 mm.
2.	腹　部……長さ	1.0 mm.	巾…… 0.8 mm.
3.	第一肢……長さ	9.4 mm.	
4.	第二肢……長さ	6.9 mm.	